

青梅市文化財ニュース

第 3 8 8 号

令和 2 年 2 月 1 5 日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土博物館（青梅市駒木町 1-684 TEL0428-23-6859）

『御嶽菅笠』の著者 齋藤義彦について

齋藤義彦は、天明 5（1785）年に秩父郡原谷村大野原（埼玉県秩父市）の荒船吉兵衛の長男として生まれました。幼くして学を好み、秩父神社神主の^{そのだちくぜん}菌田筑前に従って神道を学びました。秩父神社は、延長 5（927）年に編纂された『延喜式』に掲載されている神社です。現在では途絶えています、神楽も盛んであったと云われています。

義彦は、秩父神社での修業後、郷里にもどり、齋藤義兼の養子となり、齋藤家が神主を務める秩父郡長留村の諏訪神社に勤仕しました。その後、江戸に出て幕府の神道方吉川家に仕え、京にも上り神祇伯王家にも出仕したようです。

文化 5（1808）年には、朝廷から「むさしの国秩父郡長留村すは大明神神主旗居義日子」^{あわじのかみ}の名義で、「淡路守」という官名を頂く口宣案を左中弁和定より受領しました。以後、齋藤淡路守義彦と名乗ることもありました。その頃から、義彦は御岳山に足繫く通い、御師家の青年達と交流し、神道の本質、国典を説いて廻りました。

文化 12（1815）年、義彦は武蔵御嶽神社の太々神楽祝詞を作成し、今日ある武蔵御嶽神社の太々神楽舞十八座を確立し『御嶽山^{だいだいのかぐらのりと}大麻止乃豆乃天神^{おおまとのつのあまつかみのやしろ} 社太々神楽考』三卷三冊を著しました。御師の片柳栄重はあとがきで、自分より年下である 31 歳の義彦を「我がものおしへびと」と評価しています。

幕末であった当時、義彦が御岳山に与えた影響は大きく、御師達は、その後の明治政府における神仏分離令にも冷静に対処できたと言われています。

また、麓の青梅村の人々とも交流があり、『玉鉾道伝^{たまほこみちのでん}』という著書の序文は青梅村の上町の酒造家であった守谷茂右衛門寛^{ひろまだ}が執筆し、同じ上町の小峰家には、義彦が延喜式内社の所在地や祭神を詳細に記した掛け軸が残されていました。

義彦は歌人としての才能もあり、多くの和歌を残しています。そのなかには、「文政五年五月十七日 みたけやまをよめる歌 並に短歌」と題し、御岳山や秋川流域の山々の神々しさを長歌に詠み、反歌には「天傳ふ月のみたけのゆふかづらかけていのらむ神のまにまに」としています。そのほかにも、御岳山を詠んだ歌は多数あります。

文政 8（1825）年には、延喜式内社である出雲伊波比神社（埼玉県入間郡毛呂山町）の縁起『臥龍山宮傳記^{いずもいわい}』を著し、神主が幼少であったため、社殿の解体修理も補佐しました。

50 歳になった天保 5（1834）年、義彦は『御嶽菅笠』を刊行しました。書き出しから「^{たつふしやまのみやつてがみ}股引草鞋玉小菅、^{ももひきわらじたまこすげ}すげの小笠の波たちて旅の装束もみ吉野の、御嶽のみちの行程は、

娘盛りの十六里」と、江戸日本橋から御岳山までの道のりを、青梅街道の風景や名物を交えて、七五調の軽妙な言葉を使い著しています。御岳山内の御師家については、「い
らかならべし家々は誰が御師やらん黒田^{くろだもく}奎、ひだりは橋本^{うつばや}、靱矢のえびらになびく片柳、
高名の下は権^{ごんのかみ}正、畠中なる秋山の紅葉をみつつ春くれば、左近の桜咲き乱れ・・・」と
言葉のかけ合わせを巧みに使い、すべての御師家名が出てくる文章に仕立てています。
熟達した文才と、30歳までに千度も登ったと述べている御岳山への想いの籠った冊子は、
今日でも私たちに十分楽しませてくれます。

天保12(1841)年3月21日、義彦は、寄留していた北埼玉郡増戸村の根岸家で57年の生涯を閉じます。故郷である秩父郡小鹿野町長留の墓所には、齋藤義彦淡路大神の祠があり、昭和15(1940)年に齋藤義彦大人百年祭を記念して建てられた笠付石燈籠が建っています。竿石正面には「淡路守齋藤義彦大人御墓前」、右側面には「大人遺詠 冬とのみおもひしものをはしりてのうめの香そする春きぬらしも」左側面には「里人はいさをたゝへてまもらひてみはかもるなりあかきこゝろに」と刻まれています。墓所は埼玉県の旧跡に指定されています。

墓所の近辺はかつて「淡路屋敷」と呼ばれており、近くには義彦が神主を務めていた諏訪神社が今も鎮座しています。

齋藤義彦の著作物には、口語文も交えた『今物語國^{いまものかたりくにのおきごと}頭言』、『古事記神代天津日嗣』、初学者のための『神拝小言集』『大祓詞略解』、義彦の歌を集めた『義彦家集』もあります。

＊本ニュース作成にあたり、元青梅市文化財保護審議会会長齋藤慎一先生に御教示いただきました。ありがとうございました。

(文責 小島みどり)



齋藤義彦墓所の石燈籠
(令和元年7月調査時撮影)



齋藤義彦肖像
(『埼玉史談』第12巻第2号口絵)